

学びの広場



京都市教育委員会
教員養成支援室
令和6年11月9日 No.3

第2回京都市教育学講座

総合教育センター指導室長 東良 雅人 先生



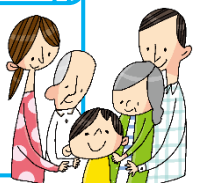
『主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり ～一人一人の子どもを主語にするために～』

子どもたちの多様化など、学校が様々な課題に直面している今。子ども達を一律に育てていく学びからの転換が求められていると、冒頭にお話がありました。そして、新たな時代に向けた子どもの学びとして、育成を目指す資質・能力をよりよく育むために、子どもたちが一番学べる方法を考え、学びが一人一人の子どもの自分ごとに繋がっていくようにすることが大切と説かれました。自転車の絵を例に、子どもによって学びの道筋は異なること、どのような道筋でそこに至ったのかが大事であり、子どもの自主性の尊重と教師による指導の調和を踏まえて、主体的・対話的で深い学びの視点から授業を行うことが重要と教えていただきました。塾生の中には、教育実習や大学で模擬授業をしたことと結び付け、「子どもが主語になる授業ができていなかった」「教師主導になってしまっていた」と振り返り、「児童生徒自身が問いを生み出せるような働きかけをしていきたい」「子ども自身が自己決定し、自分の思いを広げられるような授業にしていきたい」と次への意欲につなげている姿が印象的でした。



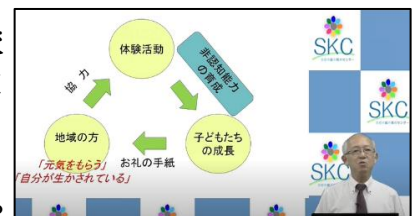
特別講座①

総合教育センター研究課参与 島本 由紀 先生



『地域とともに育む京都の教育 ～番組小学校の創設と京都ならではの教育活動～』

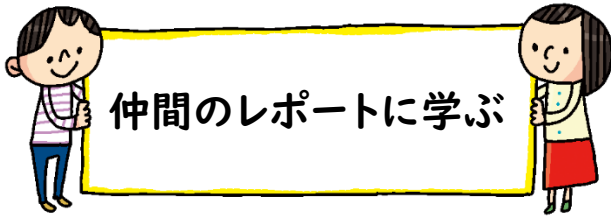
映像配信の特別講座①では、地域と共に歩んできた京都の教育についてご講義いただきました。京都では、町衆の熱い思いによって、明治2年から番組小学校が設立され、「まちづくりは人づくりから」という理念の元、地域の力を生かした教育実践がされてきたことを、様々な資料を示しながらお話されました。教師自身が、学校は地域に支えられているという意識をもつこと、そして学校と地域のよりよい協働の在り方について考えていくことの重要性を学ぶことのできる講座です。



皆さんの学びの姿



- ・講師の先生やグループアドバイザーの先生方に「もっと知りたい」と思ったことを積極的に質問する姿が見られました。
- ・塾の前後に、カリキュラム開発支援センターを見学したり、調べ物をしたりする姿も見られました！



仲間のレポートに学ぶ

このコーナーでは、「レポート集」に綴られた素晴らしい学びの1ページを紹介します。ぜひ、仲間の学びにふれてみてください。

第2回京都市教育学講座

『主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

～一人一人の子どもを主語にするために～』を受講して

全体会では、一人一人の子どもを主語にするために「子どもたちが一番学べる方法を考える」ことの大切さを学んだ。指導者の目線に立つと、どう教えるかということにこだわってしまいがちだが、大事なのは子どもが自ら学習に働きかけ、自分のやり方を見つけて学びの多様性を感じられる授業を展開することだとわかった。そのためには、子ども側の視点に立ってメタ認知的に授業を評価したり、教師の独壇場にならないように目標や目的を子どもたちと共有したり、日常的に観察・対話して彼らの学びのプロセスを捉えたりすることが教師として求められるということ学んだ。要するに、目の前にいる子どもたちの実態に合わせて「どう学ばせたいか」を考えて指導をしていく必要があるということだ。

分散会では、『自己との対話』を大切に授業づくりについて議論した。グループワークと個人ワークは決して二項対立ではなく、場面に応じて柔軟に組み合わせながら取り入れていくべきだと学んだ。子どもは考えが固まっていない状態でグループワークに入ると、かえって思考が停止し、他者の意見に流されてしまうかもしれないという危険性を孕んでいる。それでは活動あって学びなし、となり協働的な学びだとは言えない。子どもが目の前の学習を『自分ごと』だと捉えられるように、自己との対話の機会を与え、彼らが自分の考えを整理し、深め、広げられるようにサポートしていきたいと思った。どのようなワークの形態もあくまで一つの手段であるので、そこに固執しすぎず、どういう道筋でそこに至ったのかということに重要視していきたいと考えた。

講義を通して、子どもたちの伴走者として学びのプロセスを大事にできる教師になろうと感じた。模擬授業や教育実習においても自分が行う授業を一步引いて見た時に、子どもたちが自ら考える時間を与えられているか、そして学習のねらいや意味が伝わるようにできているか、などを意識していきたいと感じた。何よりも子どもたちを知る努力をし、熱意を持って向き合うことで信頼関係を築くことの大切さに気がついた。全ての子どもが授業の中で問いや気づきを持ち、心に残る学びを得られるように場面や実態に応じて授業をカスタマイズする力を身につけていきたい。

授業づくりについて「子どもたちが一番学べる方法を考える」「目の前にいる子どもたちの実態に合わせてどう学ばせたいかを考える」ということの大切さについて学びがあったようですね。分散会では『自己との対話』を大切に授業づくりについて議論が進んだようですね。子どもたちが目の前の学習を「自分事」として捉えることができるようサポートしていくことについても目が向けられていますね。「伴走者」という考えともリンクしていますね。後半の部分からは教員に向けての熱い思いも感じました。学びをいかしていってくださいね。



次回は、

京都市教育学講座④ 中学校専門講座『中学校における教師の実践～生徒理解を深めるために～』

小学校専門講座『小学校における教師の実践～児童理解を深めるために～』

小学校や中学校現場で、教師として多くの児童生徒と関わってこられた教員養成支援室専門主事／指導室指導主事の先生方が講師となり、児童生徒理解を深めるために、どのような実践を積み重ねてきたかについてディスカッションします。「児童生徒と信頼関係を築いていくために」「一人一人を徹底的に大切にするために」どのように児童生徒と向き合い、どのような働きかけをしていくことが重要なのかを、この講座を通して学んでいきましょう。